

うかと言った点について随分激しい論議が戦わされましたが、結局購入に踏切ったものです。

これらは動植物の系統分類学の専門家に基礎資料として役立つことは勿論と思いますが、これか

ら何かを勉強して見たいと思っている教養部在籍の学生諸君にも、少々程度が高いとは思いますが、十分に理解できオリエンテーションの役割を果たすことができるものと思っております。

化学関係ロシア語雑誌英訳版の 50年度購入予定誌決定

10月7日(月)に化学系図書懇談会を附属図書館会議室で開催し、下記の通り50年度購入予定誌を本年通りに決定した。価格が上昇してきたため、利用状況の低いものの切りすても検討されたが、今後の利用状況を今しばらくみることにして、これまで通り発注することになった。なお、本年度の購入額1,153,000円の部局ごとの負担額も同時に決定された。予約誌名と所蔵巻号(すべて附属図書館1階雑誌室に排架)は次の通り。

1. Applied Biochemistry and Microbiology.
bm 3(1967)–7(1971)+
2. Biochemistry. m 35(1970)–38(1973)
+
3. Bulletin of the Academy of Sciences of
the USSR, Div. of Chemical Science. m
1970–22(1973)+
4. Chemistry of Natural Compounds. bm
7(1971)–8(1972)+
5. Doklady Chemical Technology. bm 190
(1970)–213(1973)+

6. Doklady Chemistry. bm 190(1970)–
213(1973)+
7. Doklady Physical Chemistry. 160(1965)
–195, 202–213(1973)+
8. Journal of Analytical Chemistry, USSR.
m 25(1970)–28(1973)+
9. Journal of General Chemistry, USSR. m
38(1968)–43(1973)+
10. Journal of Organic Chemistry, USSR. m
6(1970)–9(1973)+
11. Kinetics and Catalysis. bm 11(1970)
–14(1973)+
12. Microbiology. bm 39(1970)–42(1973)
+
13. Pharmaceutical Chemistry. m 1970–
7(1973)+
14. Polymer Science, USSR. m 11(1970)
–15(1974)+
15. Russian Chemical Reviews. m 39(1970)
–42(1973)+

図書系職員業務別研修(第1回)

図書系職員の学内研修としては、これまで初任者研修は毎年行なわれてきたが、それに続く研修が、期待されながらも実現に至らなかった。したがって、本年度第1回の試みとして、「資料の収集業務」をテーマに、10月29日(火)より3日間、下記により開催した。研修参加職員としては、テーマに関連ある業務担当職員にしばったが、予定の20名を10名ほど越えたこともあって、討議

を中心とした研修会という所期の目的は、必ずしも十分に果せなかったが、幸い参加者の好評も得たので、今後も引きつづき開催していく予定である。研修プログラムはつぎの通り。

- | | | |
|-----|-------------------|-------------------|
| 第1日 | 雑誌の収集 | 金井孝農図掛長 |
| 第2日 | 単行書の収集 | 武内隆恭閲覧課閲覧
貸付掛長 |
| 第3日 | その他の資料の収集(プレプリント) | |

近藤禧禎男掛長(医学図書館) 日本医学図書館協会賞を受賞

協会賞受賞の対象となったのは「『東京医事新誌』明治初期の医学雑誌についての考察」である。氏の論文は、当時、我が国における漢方医学あるいはドイツ系医学が受け入れられている状況下にあつて、英米系医学を標榜して出発した「東京医事新誌」を通じて、明治初期の医学および医学雑誌

誌の歴史的、書誌的解明を多角的に多数の文献を駆使しながら、綿密に分析され、その結果として、それが医学雑誌に及ぼした影響その他について詳述されている。これは、初期の医学文献ならびに医学史に対する関心を、読者に改めて示唆する論文として高く評価されたものである。

相互利用書の現状 — その分析と今後の課題 —

数理解析図書室 福島啓介 小花洋一

1. はじめに

現在、京都大学図書館(本館・学部・研究室 etc.)において、利用者の希望する資料(図書・雑誌 etc.)をすみやかに提供するための一つの手段として、図書館間の相互利用書の使用がある。そしてその使用法については、過去の「静脩」v. 8, No 2 (1971):「図書相互利用書」の使用について、あるいはv. 10, No 2 (1974):「相互利用書の使用法について」に記載されている。ところが相互利用書の様式が統一され使用され始めて以来すでに3年の歳月が流れているにもかかわらず、その使用に関する利用状況や分析等の報告は、いまだになされていない。その意味で数研における相互利用書の利用状況から、その存在意義と分析の必要性が導き出されれば本望である。

2. 数研における相互利用書の利用状況

分析に先立ち利用者と資料の2つの観点から以下の5つの項目により分析を進めていきたい。①利用者(階層)②種類(文献)③返却日④学部・学科・研究所別⑤数研からの利用(①~④は他部局→数研利用であるが⑤は逆に数研→他部局利用

である)なお①~③は全体の分析であり④はさらに詳しくそれら进行分析している。(期間:昭和43年12月~昭和49年10月)

① 利用者(階層)

表 1

身分 項目	P	Q	L	A	D	V	G	O	T
K 件数	125	182	75	525	1608	132	189	729	3565
K 利用者率	4 %	5 %	2 %	15 %	45 %	4 %	5 %	20 %	100 %

P:教授 Q:助教授 L:講師 A:助手
D:院生 V:研究所 G:学生 O:その他
T:計

①の表より院生の利用が45%でいちばん多く、次にその他20%,助手15%,助教授・学生5%とつづいてゆく。ただしその他に関しては、附属図書館の利用(他大学等からの文献複写依頼による)がほとんどで他に事務官・技官などが含まれている。